中世ヒンドゥー教にみる『地上の天界』説と環境倫理

文学部　橋本泰元

キーワード:インド・ヴリンダーバン、クリシュナ信仰
チャイタニヤ派、環境保全運動

はじめに

西欧の諸宗教は、自然に対する「支配権」が人間に付与されているという神学があるために、しばしば批判されている。しかし、西欧の諸宗教は、また、自然に対する人間の「執事の役目」の観念を含んでおり、それはエコロジカルな倫理観により資しているかも知れない。インドの宗教伝統は、西欧の諸宗教における自然に対する配慮への広く認められている欠如に対してある調整策を与えられる可能性のあるものとして、よく引き合いに出されている[1]。しかし、キリスト教とヒンドゥー教は、ともに性格のまったく異なった宗教であり、そのどちらにも多様な見解が見出される。神学者は世界が創造者の所産であるという理由で自然世界に価値を見出し、自然のなかに神の反映を見出そうとするかも知れない。いっぽう、遁世する修行者たちは自然世界をさまざまに見なして、自然世界が魅惑と娯楽―どちらかを優先させて―の源泉であると見なすかも知れないのである。

クリシュナを崇拝の対象とするヒンドゥー教の神学学派は、国際的な支援を受けて再植林とエコロジー活動事業を最近開始した。この事業は、北インドのウッタル・プラデーシュ州のヴリンダーバン（Vṛndāban < Skt. Vṛndāvana）市―クリシュナが幼年期を過ごした聖所と見なされている―を中心に行われている。帰依者たちは、クリシュナの生誕地―ヒンディー語でブラジュ（Braj）、サンスクリット語でブラジャ（Vraja）と呼ばれている―で、おもに宗教的な関心と理念に動かされてエコロジー運動を開始している。

歴史的・宗教的背景

本論文の全体を通して問題となる主題を照射する『バーガヴァタ・プラーナ』（10.22.29-37）[2]の一節を下に掲げておく。

atha gopaiḥ parivṛto bhagavān devakīsutaḥ /
vṛ̥dāvanād gato dūraṃ cārayan gāḥ sahāgrajaḥ // 29 //
nidāghār kātape tigme chāyābhiḥ svābhir͡ātmanaḥ /
ātapatrāyitān vīkṣya drumān āha vrajaukasaḥ // 30 //
he stokakṛ̥ṣṇa he aṃśo śrīdāman subalājuna /
viśālarṣabha tejosvin devaprastha varūthapa // 31 //
paśyat͡etān mahābhāgān parāthaikāntajīvitān /

vātavarṣātapahimān sahanto vārayanti naḥ // 32 //
aho eṇāṃ varaṃ janma sarvaprāṇyupajīvanam /
sujanasya͡ īva yeṣāṃ vai vimukhā yānti na͡ ar thinaḥ // 33 //
patrapuṣpaphalacchāyāmūlavalkaladārubhiḥ /
gandhaniryāsabhasmāsthitokmaiḥ kāmān vitanvate // 34 //
etāva j͡ ja nmasāphalyaṃ dehinām iha dehiṣu /
prānai r͡ a͡ rthai r͡ d hiyā vācā śreya eva ācaret sadā // 35 //
iti pravālastabakaphalapuṣpadalotkaraiḥ /
taruṇāṃ namraśākhānāṃ madhyena yamunāṃ gataḥ // 36 //
tatra gāḥ pāyayitva͡ ā͡ paḥ sum ṛ ṣṭāḥ śītalāḥ śivāḥ /
tato n ṛ pa svyaṃ gopāḥ kāmaṃ svādu papu r͡ ja lam // 37 //

さて、牧夫たちに囲まれて、至福者であるデーヴァキーの息子［クリシュナ］は、
ヴリンダーヴァナから行った遠くへ、牛を追いながら、兄［バララーマ］を伴って。(29)
夏の太陽の刺すような陽差しのなかで陰によって、自分の親しい友たちに、
陽差しから守ってくれる木々を見て、言った、ブラジュヤの牛飼いたちに。(30)
ストーカクリシュナ、アンシュ、シュリーダーマン、スバラ、アルジュナよ。
ヴィシャーラ、リシャバ、テージャスヴィン、デーヴァプラスタ、ヴァルータパよ。(31)
見よ、これらのたいへん幸福な、利他のためのみに生きているものたち［木々］を、
風・雨・酷熱・寒気に耐えているものたちは、護っている、われわれを。(32)
まさに　これらの生は優れており、一切生類の支えなり、
あたかも、善き人に施しを求める者たちが、失望して帰ることがないかのように。(33)
葉・花・実・陰・根・皮・木材によって、
香・樹液・灰・炭・若芽によって、願いを満たす。(34)
もろもろの個我の生の有意義性は、現世において、個我のためにこれほどである、
命・富・智慧・言葉によって、優れし人は　まさに　行動すべし、常に。(35)
このようにして　若芽・花房・実・花の群れが盛り上がっていて、
若い枝がたわわになっている中を、ヤムナー川に行った。(36)
そこで、牛たちに水を飲ませて、［その水は］清らかで冷たく吉祥である。
それから、人々の守護者よ、牧夫たちは心ゆくまで甘い水を飲んだ。(37)

それから、このクリシュナの故地、ヴリンダーバンをとりまく環境を描くこの章は終っわている。

ヴリンダーバンは、まさしくクリシュナが住んだが故に、クリシュナ神崇拝において重要であり、何世紀も続いてきたのである。ベンガルのガウリーヤ・ヴァイシュナヴァ（Gauṛīya Vaiṣṇva）は、ヴリンダーバンでは5世紀にわたって、ベンガル地方の場合と同様に、たいへん顕著な影響を及ぼしてきた。その重要性は、この派の開祖チャイタニヤ（Caitanya）が16世紀に、この地方に自派を樹立するために複数の愛弟子を派遣したことによって示される。また、チャイタニヤ自身、このクリシュナの青年期と結びついた地帯を礼拝するために長い巡礼をおこなったのである。同様に20世紀においては、クリシュナ

精神国際協会（ISKON）の開祖スワーミー・バクティヴェーダーンタ・プラブパーダ（Svāmī Bhaktivedānta Prabhupāda）が1966年に渡米する前、約10年間住み、1977年歿まで彼は定期的にここを訪れていた[3]。後述するように、この町自体は、宗教的に大変効験があると考えられている聖地として、クリシュナ神の信奉者の宗教思想のなかできわめて重要な役割を担っているのである。

チャイタニヤの6人のゴースヴァーミン（Gosvāmin）と呼ばれる弟子であり神学者たちによってヴリンダーバンにおいて確立された、さまざまなヴィシュヌ派の特徴的な神学において、クリシュナは崇拝の対象であり、究極の真実在そのものであると見做されている。クリシュナはヴィシュヌ神の顕現である化身（avatāra）でも、また地上における最高神の部分でもなく、究極の真実在の擬人そのものである。この宗派における最も重要な観念のひとつは、ヴリンダーバンにおけるクリシュナの永遠なる神々しい行状（līlā「遊戯（ゆげ）」）に対する強調である[4]。この宗派の最も顕著な実践方法は、この神々しい遊戯の参加者として自己を念想することである。

神学者のゴースヴァーミンたちは、信愛の教義を明示するために審美論ラサ（rasa）に狙いをつけた。このラサ論において、芸術的な演劇作品や詩作品は、聴衆・観衆に、特定の個人的な経験に結びついた個人的な感情的な状態（bhāva）だけではなく、感情的な意識の普遍的な状態―それは歓喜をともなった審美的受容である―を経験させる必須条件であり、表出なのである。8ないし9種類のラサが経験され得るが、審美学者たちは、芸術作品にとって最も効果的で基本的なラサとして、長い間、śṛṅgāra（愛情）を認めていた[5]。ゴースヴァーミンたちはこの審美論の術語を活用したが、その目的を変えた。すなわち、彼らにとって、クリシュナは唯一の男性登場人物（nāyaka）となり、クリシュナの生涯の物語が唯一のドラマとなった。さらに視聴者は、喚起された意識の状態を享受する受動的な観察者から、ドラマそのものの中の積極的な参加者と変成した。審美学者のアビナヴァグプタ（Abhivnavagupta）はラサの経験は解脱（mokṣa）の獲得に類似しているが、促進剤であるドラマが続く間経験できる一時的なものであると書いているが、ルーパ・ゴースヴァーミン（Rūpa Gosvāmin）は、クリシュナへのバクティ（bhakti 信愛）によるラサの獲得は解脱に等しいと書いている[6]。聖典に描かれたクリシュナの仲間たちは、クリシュナとの愛情関係にあるモデルとして捉えられている。そして帰依者は、この仲間たちの一人と自己を同一化すべきなのである。クリシュナとの4種類の愛情関係が説かれている。すなわち（1）奴僕（dāsya）、（2）親（vātsalya）、（3）友人（sākhya）、（4）愛人（mādhurya）の関係である[7]。これら4種類の関係は、愛情の変容と見做されており、実際に、この目的は、これらのどれかの方法によってクリシュナへの信愛を発展させることにある。

ブラジュの牧女（gopī）たちは、愛する者への無私なる帰依の理念を具現化しており、典型的な帰依者と見做されている。そのなかでラーダー（Rādhā）が中心人物であるが、『バーガヴァタ・プラーナ』には特に明記されてはいないが、およそ200年後のベンガルのサンスクリット詩『ギータ・ゴーヴィンダ』（*Gītagovinda*）においてクリシュナの最愛の牧女として描かれている。彼女は、ときに、クリシュナとの関係の中で理想的な信愛の形を示す、人間の霊魂の象徴的な表現と見做されている。また、クリシュナとは不可分の女性原理であり、両者が究極の真実在を形成すると見做されている[8]。究極の宗教的目標は、クリシュナ神への無私なる帰依と愛情の完成であり、後生はクリシュナの天界であるヴァ

イクンタ（Vaikuṇṭha「災厄からの解放」）、ゴーローカ（Goloka「牛の世界」）、あるいはヴリンダーヴァナまたはブラジュャにおける遊戯の継続であると考えられている[9]。キンズレイが述べているように、クリシュナの天界は「堂々と賞讃されている、牧歌的な灌木の町ヴリンダーヴァナ以外のなにものでもなく」、「クリシュナの天界における遊戯の場所は、彼が青年期を送った地上のこの場所と同じなのである」[10]。この天界と聖典に記されたこの地上の町は、しばしば区別されることはない。今日、地上の町ヴリンダーバンは、帰依者によってクリシュナの永遠の遊戯の場所と見做されている。要するに、人は終生、ヴリンダーバンにおいてクリシュナの帰依者の模範的な行為を模倣し、純粋な信愛によって解脱を得て天界のヴリンダーバンにおいてクリシュナへの奉仕と帰依が永遠に続くように努めている自己を念想することである。

クリシュナの帰依者たちは、『バーガヴァタ・プラーナ』第10巻がクリシュナの人間としての生活、特にヴリンダーバンおよびその近隣での彼の青年期を説き明かしているので、たいへん崇めている。このプラーナは、ガウリーヤ・ヴァイシュナヴァの神学者ゴースヴァーミンたちにとってとても重要であったので、彼らは天啓（śabda「聖言」）以外の知識根拠（pramāṇa）を拒否した。そして、この聖典を、真髄を明かす天啓書であり、この末世にとって理想的な聖典であると見做していた[11]。『バーガヴァタ・プラーナ』やその他の聖典、そして宗教讃歌は、クリシュナの行為がヴリンダーバンの近辺、すなわちゴーヴァルダナ（Govardhana）山、ヤムナー（Yamunā）川などで特定の場所で行われたと記している。帰依者たちは、ラーダー・クリシュナの行為が行われた場所でラーダー・クリシュナへの親近感が特に感じることができるので、そのような場所に参詣することが強く奨励されている。そして、彼らは特定の場所でラーダー・クリシュナの行為を模倣する。聖典も、クリシュナが永遠に嘉したヴリンダーバンとブラジュを取り囲む地域の美しさを称賛している。ブラジュの地帯はクリシュナ自身の身体、神の地勢的形態、ラーダー・クリシュナの愛情の具象的顕現とさえ言われている[12]。特定の場所が、クリシュナ神の身体の特定の部位と同定されている。例えば、マトゥラー市が心臓、ヴリンダーバンが眉などである。そこで、巡礼者たちは、この地の土が神が歩いたことによって聖化され、神そのものとかわらないと見做し、両手で頭に擦りつけ、口にいれ、そして神から恵まれた施物（prasāda）、神の恩寵が注入された食べ物として戴く[13]。ブルックスが述べているように、「この町のどこでも、聖なる意味を持っており」、「世俗の部分と聖なる部分があるとは言えない」[14]。特異性が価値を賦与するのであり、土のどの分子も聖化され得るが、いくつかの場所は、ラーダー・クリシュナの特別の行為がなされたために、ほかの場所よりもより聖なるものと帰依者たちに見做されているのである。

多くのヴァイシュナヴァの聖典は、木々の葉や実が宝石のように輝いているブラジュの美しさを賞賛している。実際、自然の美しさは、その場所が神の顕現によって嘉された証拠として見做されているのである[15]。『ギータ・ゴーヴィンダ』は、ラーダー・クリシュナの土地の自然の美しさを能弁に描写しているヴァイシュナヴァ詩のとくに生き生きした例である。ほかの聖典、例えば『マハーバーラタ』の補遺である『ハリヴァンシャ・プラーナ』は、およそ5世紀に編纂されたが、ブラジュの森の美しさゆえに牧夫たちが住むようになったと伝えている。ブラジュの美しさのテーマはクリシュナの生涯を描く文学につねに登場する。この地上における天界は、クリシュナの遊戯の場面であり、永遠なる遊

戯が行われている天界の同じものと見做されているのである。

エコロジーのプログラム

しかし、今日、この地上の天界に問題が生じている。ヴリンダーバンの町の自然破壊はひどく、この地帯は、西側に隣接するラージャスターンと同じように砂漠化が急速に進んでいる。諸研究によれば、地下水面が1年で1.5mの割合で沈下しており、水質が悪化している[16]。ヤムナー川も、上流の工場群の工業廃水や汚水によって非常に汚染されており、汚水の一部はヴリンダーバンからも排水されている。未処理の下水が巡礼路を冠水し、多くの場所でヤムナー川に直接流れ込んでいる。この問題はたいへん深刻で、インド政府はヤムナー川が飲料や沐浴に適していないと宣言した[17]。このような宣言が帰依者や巡礼者たちの活動に影響を及ぼすだろうと考えられるが、それほどでもない。マトゥラー市の大規模な石油精製工場が、約11㎞下流にあるが、この地域一帯の空気を汚染している。残念ながら、環境破壊はこの地帯にとって特異なものではない。インドの広大な地帯が、住宅供給や農耕地、また急激な人口増加による薪の需要によって森林伐採されている。また下水処理が同じように広範囲にわたる問題である。ヴリンダーバンの場合は、特殊な環境問題に面している。なぜならば、居住人口56,618（2001年現在）のこの聖地は、1年に約200万人の巡礼者を迎え入れるからである。この聖地に巡礼者を導く現代の輸送機関と大型ビジネスは、交通量を増大させ、上下水道処理など自治体の供給施設の能力を酷使する。

ヴリンダーバン内外の環境は、また、そこに定住しようとやって来る人々の流入によっても悪化している。比較的裕福なヴァイシュナヴァが、クリシュナの地上界における活動の場所に隠棲し、礼拝と解脱を獲得するために最も適した生活環境で余生を送りたいとしているからである。デリーの裕福な帰依者は、ここにセカンドハウスを持っている。皮肉にも、平穏なこの町の雰囲気は、「聖なる森」の宅地開発で破壊される。

明らかに、この町の環境悪化は、ヴリンダーバン地帯の環境問題となっており、生活の質の問題にもなっている。しかしながら、それはクリシュナの帰依者にとっては特に宗教上の問題でもあるのである。巡礼者はクリシュナの故地を見ようと、すなわち池や森をともなった形での神の参拝（darśana）をしようとヴリンダーバンにやって来る。帰依者はヤムナー川で沐浴して功徳を積もうとするが、上述のように、そうすることは健康被害の恐れがある。森林伐採と砂漠化は宗教上の問題でもある。帰依者はクリシュナが帰依者のために創った永遠の美しい環境のなかでクリシュナの遊戯の参加者として自己を念想するのであるが、そのクリシュナの遊戯の地上界に顕現した姿は、宗教的な感動を与えるのに資するものではない。それで、巡礼者は信仰を深めるどころか失いかねない。古聖典における記述と今日のヴリンダーバンの現実との乖離は、明白である。

ヴリンダーバンにおける生態系破壊に対する反応は、西欧人の改宗者とインド人のクリシュナ信者によって出されている。一般的なアプローチは、支持を喚起するために用いられた次のスローガンによって表現されよう。「クリシュナを気遣う者は、かれの土地にも気遣うべし」[18]。実に、上述のように、クリシュナの多くの帰依者にとって、ヴリンダーバンを中心に持つブラジュ地方はクリシュナと同一視されており、かれの具象化なのである。この方面の努力で活躍している著名な帰依者であるシュリーワッツ・ゴースワーミー

（Shrivatsa Goswami）は、クリシュナを自然に対する尊崇の模範として述べている。クリシュナはヤムナー川を汚染する悪魔カーリヤ（Kāliya）を退治したばかりでなく、クリシュナは牧夫たちを連れてゴーヴァルダナ山を礼拝し、息子のハンセン病を治すため太陽神を礼拝して、自然を尊崇した[19]。

この地帯の再緑化の大きな活動は次のように開始した。ISKCONのイギリス人会員であるランチョール・プライム（Ranchor Prime）は、ランチョール・ダーサ（Dāsa）としても知られており、ヴリンダーバンのこの状況についてよく知っていた。そこでこの町の永年の住人であるセーワク・シャラン（Sewak Sharan）とともに、この町を取り囲む11㎞の巡礼（pari-kramā）路に沿って植樹しようと計画を立てた。ヴリンダーバンの巡礼路の重要性は、スワーミー・バクティヴェーダーンタ・プラブパーダが1977年に逝去し、遺体が、信徒の礼拝を受けるために、この巡礼路に沿って最後の巡礼に運ばれたという事実によってすら明らかである[20]。また、年間200万人の巡礼者が巡礼していることでも、重要さが分かる[21]。しかし、その巡礼路は、クリシュナの遊戯がかつて明らかにあったように、その遊戯を想像させるような森の牧歌的な環境にはなっていない。

ランチョール・プライムは、ジュネーブにある環境事業に補助金を提供する国際的な環境組織であるWorld Wide Fund for Nature（WWF「世界自然保護基金」）にレポートを提出した。援助資金が3年間認められ、1991年中期から1994年中期まで年間4万ドル支給された。ISKCONは約1万本の苗木を育成し植林するために巡礼路に沿った土地610㎡の土地を寄付した[22]。

ランチョールは、Vrindavan Forest Revival Projectの当初からの相談役であり実力者であった。プロジェクトは1991年11月21日、ヴリンダー女神（Vṛndā Devī）の祭礼の日に合わせて正式に開始された。

より深刻で解決困難な問題が、ヴリンダーバンの下水処理施設であった。1970年以後、ヤムナー川に安全に排出する近代的な下水処理施設の工事が開始された。排水管が地下に埋設され町中のトイレが配水管で繋がったが、主要配水管が完成しなかった。下水遮断と排水管の破損がほとんど同時に始まり、修理されなかった。下水はそのままヤムナー川に流れおち、上水用に同じ川から取水されている状況であった。プライムは、伝統的な方法を再び採用すべきであり、不十分で不適切な下水処理施設を使うべきではないと述べている。そのために、彼は、『マヌ法典』の次の一句を引用している。

> 大小便・唾、あるいはその他の汚物によって汚されたもの、あるいは血、毒を水に放ってはならない。（4.56　渡瀬信之訳、中公文庫）

ランチョール・プライムは、インド人たちが新しい西欧の技術に夢中になり不適切にその技術を採用するようになって、この状況に適切であり古代の時の検証を受けた技術を忘れ、『マヌ法典』などに説かれた尊敬すべき教えを無視していることを非難している。彼は、西欧風の生活様式は、過度に物質主義的で、消費志向型であってエコロジカルではないので、それを採用したインド人と西欧人もその生活様式を止めるべきであると提案している。また、彼は、マハートマー・ガーンディーの言葉を引用して、インド人に機械化とテクノロジーに対して警戒するように述べ、質素な生活様式を擁護するように勧めてい

る[23]。

ヒンドゥー教の理念、価値観そして実践が、ヒンドゥー教の聖地の自然美を回復しようと、インド政府と国際社会からの援助によって開始した事業を支持するために提示されている。森林伐採と汚染された水資源による環境破壊からヴリンダーバンを守る努力、着想と意図において本質的に宗教的であるこの事業は、人々がクリシュナを愛したのとまったく同じように地球という女神を愛するだろうという期待に基づいているのである。

まとめ

クリシュナの帰依者にとって、地上界のヴリンダーバンはクリシュナの天界のパラダイスと同じものである。一心に帰依する者にとって、あらゆるものは神の創造物であるので美しく、内面の生き方を育んで、そこで永遠に続く天界の遊戯に参加したかも知れない。また、人は、彼らにとってわれわれが住んでいる可視世界は関係のない世界と考えるかもしれない。しかしながら、最も帰依している人たちが、確かにブラジュの環境浄化運動をリードしているように見えるのである。そして、帰依に熟達していない人たちにとって、環境美化活動は帰依実践の助けになるかもしれないのである。確かに、それはクリシュナへの奉仕であり、またクリシュナの創造物を大事にする適切な方法と見做すことができよう。

WWFは、ヴリンダーバンでの事業の成功が、インド中のほかの人々を勇気づけ、自分たちの環境を検証し状況改善の方法を見出すようになることを期待している。実際、それはすでに国際的に効果を及ぼしている。その例として、イギリスのレスター（Leicester）市には南アジア系の大きなコミュニティーがあるが、彼らは1993年までにおよそ8千ポンドをこの事業に寄付した[24]。

WWF Indiaは、この事業がインド中に自然環境保護の重要性に対する意識を増大させる手段として役立つよう願っている。また、WWF Indiaによれば、この企画の主要な目標は、「コミュニティーの宗教伝統に保持されてきた環境倫理の覚醒と理解を促進し、かれらに環境保護に積極的に係わってもらいたい」ということである。また、報告書は、「1993年中期から1994年中期のあいだ、ラーダー・クリシュナの自然への愛情に基づく演劇上演などを含む子供たちの文化活動が親たちやコミュニティーに影響を与える重要な手段であった」と述べている。さらに報告書は、この事業の開始3年目末に、「以前には環境の劇的な衰退に対して何ら解決策を持っていなかった民衆の共同の宗教的意識をうまく喚起することができて、宗教的な環境保全実践を諦める傾向にあったのが、徐々に逆に向かってきている」と述べている。こうした動きの実際的結果のひとつが、ウッタル・プラデーシュ州公認の教育課程のなかに、伝統的な宗教の自然観を盛り込もうというものである[25]。

その後、WWFは、彼らの事業を世界の諸宗教における環境倫理に有意義な教説と連繋させようと、Conservation and Beliefs Network（「環境保全と宗教ネットワーク」）という事務局を設けた。そしてWorld Religions and Ecology seriesの出版を後援した。プライムの本はその一冊である。WWFの後援で、宗教的理念に基づく環境プロジェクトに資金提供するためにAlliance of Religions and Conservation（ARC「宗教と自然保護の関連性」）という国際的組織が1995年に設立された。インドにおいて自然に関する宗教的重要性を強調することは、自然保護活動を奨励するための特に効果的な方法のように思われる。多くのヒンドゥー教

徒は自然保護プロジェクトに対する科学的正当化に懐疑的であり、宗教的に敏感なアプローチや宗教的に有意義な効果を持つプログラムに対してはより理解がある[26]。そこで、ヤムナー川とガンガー川の水は沐浴には衛生的ではないという政府の宣告は、沐浴による洗浄力よりも救済力に大きな価値観を置いている巡礼者を妨げることはできないのである。

それでもなお、伝統的な宗教的価値観に基づいた自然保護プログラムは、人々がこうした伝統的な価値観を信奉し尊重し続けるという前提でのみ成功を収めることができよう。インドの多くの人々が、自分たちの伝統的価値観が失われており、若い世代が、特にメディアを通して西欧文化を植えつけられていて、それが伝統的な宗教的価値観に基づいた自然保護プログラムにとって潜在的な問題である、という意見を表明している。また、インドにおいてたいへん強い禁欲主義的で一元論的な伝統が、自然世界を逃避すべき苦の領域であると見て―このような禁欲的な世界観は自然保護の努力を弱体化するかもしれない[27]―、ヴリンダーバンのクリシュナ信者のように環境を大事にすべきものとして見做さない傾向にあることは特記されるべきである。要するに、もし、人がどれか一つの実在（あるいは帰依者が見做しているように、真実在）を想像し、自身がその世界に住んで嬉々として神に奉仕していることを経験すれば、欠陥をもった現世の現実は、環境であれ他であれ、自身に関係のないものであるか、あるいは単なる気晴らしのように見えるのかも知れないのである。

ヒンドゥー教、非ヒンドゥー教など多くの宗教伝統が共存しているインドで、多くの宗教的価値観のなかから自然保護にもっとも有用なものを探し出すことは、自然世界を保全し、あるいは回復しようとする人々にとってひとつの挑戦なのであろう。

注

1　西欧の諸宗教、特にキリスト教における反エコロジカルな世界観に関する古典の典拠は LynnWhite.1967. “The Religious Roots of our Ecological Crisis.” *Science*, 10 March, 1203-07.
1995 年 4 月、ロンドンでの会議におけるジャイナ教、スィク教、仏教そしてヒンドゥー教の指導者たちは、Sri Rakesh Mathur 1995. “Can India’s Timeworn Drama Help Renew a Careworn World?” *Hinduism Today* 17（July）: 1,9. に、西欧の諸宗教、特にキリスト教は自然に価値を認めていない旨のことを述べたと、引用されている。Cf. Jonathan Benthall. 1995. “The Greening of the Purple,” *Anthropology Today* 11（June）: 18-20. Holmes III Rolston. 1987. “Can the East Help the West to Value Nature?” *Philosophy East and West* 37（April）は、同じような観察をしている（172-74）が、ヒンドゥー教と仏教のカルマの観念に関する彼の議論（175-76）は、問題である。ヒンドゥー教徒は、「人間としての生活から生じた未解決の倫理的問題」を背負ったままの「かつての倫理的主体」として動物―Rolston の皮肉っぽい表現では「前世において人間であり、誰かの祖母かも知れない存在―を評価していない、という点である。むしろ、ヒンドゥー教徒は、自己のカルマと来世のために、動物に対して倫理的な態度を取ろうとしており、動物の苦痛を最小限にして彼らの生命を保護しようとしているのである。ヒンドゥー教徒とジャイナ教徒は、同胞の生類へのこのような姿勢が、非暴力とか非障害とよく翻訳されるアヒンサーという宗教的理念に適っている行為として賞賛していた。

2 使用テクストは、*Śrīmad Bhāgavata Mahāpurāṇa*（With Sanskrit Text and English Translation）, Gītā Press, 1982 ed. およびヒンディー語版（Saṃvat 2042）.

3 Brooks, Charles R. 1989. *The Hare Krishanas in India.* Princeton: Princeton University Press. P.95.

4 この重要なlīlāの様々な考え方については、William S. Sax., ed. 1995. *The Gods at Play: Līlā in South Asia.* New York: Oxford University Press. を参照。特に次の各論文を参照のこと。Norvin Hein, "Līlā", Donna Wulff, "The Play Emotion: *Līlākīrtan* in Bengal", John Stratton Hawley, "Every Play a Play Within a Play". Clifford G. Hospital. 1980. "Līlā in the Bhāgavata Purāṇa." *Purāṇa* 22:4-22. は、このエコロジー運動を支えるバクティ神学に最も関連している研究である。

5 Edwin Gerow. 1981. "Rasa as a Category of Literary Criticism." In *Sanskrit Drama in Performance*, ed. Rachel Van M. Baumer and James R. Brandon, 226-57. Honolulu: University of Hawaii. が、文学批評におけるラサ論と、ゴースヴァーミンたちによるその信愛の神学への応用を的確に論じている。

6 Gerow 1981, 239-43. Gerald J. Larson 1976. "The Aesthetic（*rasāsvāda*）and the Religious（*brahmāsvāda*）in Abhinavagupta's Kashmir Śaivism." *Philosophy East and West* 26: 371-87. , Donna M. Wulff. 1986. "Religion in a New Mode: The Convergence of the Aesthetic and the Religious in Medieval India," *Journal of the American Academy of Religion* 54: 673-88.

7 Sushil Kumar De. 1961. The Early History of the Vaisnava Faith and Movement in Bengal. 2ed. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay. が、この関係を最も詳細に論じている。ルーパ・ゴースヴァーミンが自著*Ujjvala-nīlamaṇi*の中で愛人関係について論じているが、上掲書pp.203-22を参照のこと。また、Edward C. Dimock, 1989（1st ed. 1966）. *The Place of the Hidden Moon: Erotic Mysticism in the Vaiṣṇva-sahajiyā Cult of Bengal*. Ch. 6を参照。

8 ラーダーに関しては、John Stratton Hawley and Donna M. Wulff, eds.1982. *The Divine Consort: Rādhā and the Goddesses of India. Delhi*: Motilal Banarsidass. を参照。特に本章の記述には、本書所収の次の各論文を参照。Charlotte Vaudeville, "Krishna Gopāla, Rādhā, and the Great Goddess," Barbara Stoler Miller, "The Divine Duality of Rādhā and Krishna," Donna Marie Wulff, "A Sanskrit Portrait: Rādhā in the Plays of Rūpa Goswāmī," Shrivatsa Goswami, "Rādhā: The Play and Perfection of Rasa,"

9 De 1961, 333-39.

10 David R. Kinsley. 1979. *The Devine Player: A Study of Kṛṣṇa Līlā*. Delhi: Motilal Banarsidass. pp.113.

11 Dimock 1966, pp.181-83; De 1961, 169. 両者はジーヴァ・ゴースヴァーミン（Jīva Gosvāmin）の主著 *Tattva-Saṃdarbha* を引用している。ジーヴァにとって、末法の劫期カリ・ユガにおいてプラーナ聖典が天啓であるベーダ聖典に取って代わるものである。『バーガヴァタ・プラーナ』は、神学者のゴースヴァーミンたちにとって諸プラーナの中で最高のものであり、彼らはそれを*Brahma-sūtra*へのヴィヤーサ（Vyāsa）註と見做している。

12 David L. Haberman. 1988. *Acting as a Way of Salvation: A Study of Rāgānugā Bhakti Sādhanā*. New York: Oxford University Press. pp.125-27. および David Kinsley. 1998. "Learning the Story of the Land: Reflections on the Liberating Power of Geography and Pilgrimage in the Hindu Tradition," In *Purifying the Earthly Body of God: Religion and Ecology in Hindu India*, ed. by Lance E. Nelson. 1998. Albany: State University of New York Press.

13 Brooks 1989, p.6.

14 Brooks 1989, p.56.

15 Kinsley 1979, pp. 117-19.

16 Ranachor Dasa. 1992. “Reviving the Forests of Vṛndāvana.” *Back to the Godhead: The Magazine of the Hare Krishna Movement* 26（Sep.-Oct.）: 24-39.

17 Ranachor Prime. 1992. *Hinduism and Ecology : Seeds of Truth*. London: Cassell. p. 108 はインド政府報告書 The State of India’s Environment（New Delhi: Centre for Science and the Environment, 1982）を引用している。

18 Dasa. 1992, p. 30.

19 Prime. 1992. pp. 54-56.

20 Brooks 1989, p. 95.

21 Prime 1992, p.105.

22 Prime 1992, pp. 104-18.

23 Prime 1992, pp. 109-12.

24 Friends of Vrindavan. 1993. “Protecting Sacred Forests: Linking Leicester’s Community with the Sacred Forests in India.”

25 World Wide Fund for Nature India. 1994. “Reviving the Sacred Forests of Vrindavana. Technical Report, July 1993 to June 1994.” do. 1995. “Vrindavana Conservation Project.”

26 Kelly D. Alley. 1998. “Idioms of Degeneracy: Assessing Gaṅgā’s Purity and Polution.” In Lance E. Nelson 1998.

27 Lance E. Nelson. 1998. “The Dualism of Nondualism: Advaita Vedānta and the Irrelevance of Nature.” In Nelson 1998.

注以外の参照文献

坂田貞二・橋本泰元「中世インドにおける宗教家の旅と思想形成」『歴史学研究』第582号（1988年7月）

坂田貞二・橋本泰元・田中多佳子・福永正明「地上の天界を歩く人々―北インドにおけるクリシュナ信仰と集団巡礼」『アジア・アフリカ言語文化研究』第37号（1989年3月）

橋本泰元「ラースリーラー:『クリシュナの愛の遊戯』をめぐって」『コッラニ』第13号（1989年9月）

坂田貞二・橋本泰元「解説と翻訳:16世紀北インドの巡礼案内書に見られるブラジュュ地方の聖地」『昭和63年研究年報:人文・自然科学系』第16号（平成元年3月）